

## 論文——シンポジウム「南方熊楠から見たヴィクトリア朝」

### 南方熊楠の学問形成とそのイギリス時代 ——南方熊楠のロンドン 1892-1900

田村 義也

#### 1. 南方熊楠について

南方熊楠(1867-1941)は、1892年9月にアメリカからロンドンへ渡り、1900年9月までの8年間を同地で過ごした。その間、1893年10月の‘The Constellations of the Far East’をかわきりに、学術誌 *Nature* および *Notes and Queries* に発表した研究ノートは、離英までに両誌合計で50本におよんだ。<sup>1</sup> 帰国後も含めると、生涯の *Nature* 誌掲載投稿は51本、*N & Q* 誌掲載投稿は324本を数える。<sup>2</sup>

帰国後の41年間に彼が日本で続けた研究活動は、文献研究と自然観察の文理両道にわたることとなり、また学界向けの著作だけでなく神社林保護の社会活動なども顕著だった南方熊楠について、ひとことでどんな人物であったのかと言い表すことは、没後77年を経た今日もなお容易ではない。今日の百科事典などでも漠然と「植物学者(生物学者)にして民俗学者」と説明されることが多い<sup>3</sup> のだが、20代後半のロンドン時代、南方はまだそのどちらとも言いがたい領域で、論文を公刊するという学者としての営為をはじめていた。地元の和歌山中学卒業後は日米の高等教育機関を中退したのみ、研究者としての訓練を組織的に受けることのなかった青年が、忽然と異国の地で学術誌への投稿をはじめ、それが7年間で掲載50回に及んだというだけでも、じゅうぶん驚嘆にあたいしよう。本報告では、そのロンドン時代を中心に、南方熊楠の学問形成を検証したい。

### 1.1 慶応3年生まれということ

南方熊楠の生まれた1867(慶応3)年は、日本文化史上の特異年である。夏目漱石と正岡子規をはじめとして、山田美妙、上田万年や芳賀矢一らは東京大学予備門(旧制一高の前身)で南方と実際に同窓生であったし、尾崎紅葉、幸田露伴といった文学者のほか、文筆家宮武外骨、画家藤島武二、建築家伊東忠太といった、明治文化史を彩る人物達が、この慶応3年とその前後に集中して誕生している(美妙斎山田武太郎や、子規正岡常規の朋友秋山真之は慶応4年の生まれだが、学校では彼らと同窓となった)。西暦2017年は、彼ら慶応3年生まれたちがそろって生誕150周年を迎えた。これは奇遇のようだが、彼らがそういった「特異」な世代となるに至った時代背景を考えることも出来るように思われる。

彼らは、親や教師たちは江戸時代人であり、しかし自身が成長したのは明治という、時代のはざまの世代であった。近世日本の教養を身につけた世代を親に持ち、そして、日本近代の学校制度が、この世代の成長と足並みを揃えて形作られていったという経緯を、この世代は共有している。

小学校、中学校といった、市民平等の時代の初等中等教育の制度を定めた明治の「学制」公布は1872年であり(イングランドおよびウェールズで市民皆教育を準備したとされる1870年の The Forster's Act と、それほど時間差がないことは興味深い)、実際南方熊楠自身、郷里和歌山で順次在籍した雄小学校、鍾秀学校、和歌山中学において、一期生または(半年遅れの)二期生といった最初期の生徒であった。和歌山中学は、彼の入学した1879年に創立された、和歌山県内で最初の(従って当時唯一の)中学校であり、県内の同年代の児童のうち優秀なものたちは、学習の継続を希望する場合には、和歌山市へ上り同校へ集まったのである。そして、同校で教鞭を執っていたのは、旧藩時代にあっては紀州徳川家(および支藩の田辺安藤家)お抱えの漢学者や画師といった、近世日本学芸の水準を代表する人物達であった。<sup>4</sup>

さらに、中学卒業後も学問の継続を希望する生徒は、上京して東京大学入学を目指すこととなる(東京大学は、1877年にすでに設立されていた)。南方らが中学を卒業した1883年時点では、そのための標準的な過程が東京大学予備門(これも1877年設立)への進学であった(同校は、南方が中

途退学したあとの1886年には第一高等中学校となり、さらに1894年、高等学校令の制定にともない第一高等学校と改称されることになる。

こうした、小学校⇒中学校⇒高等学校(旧制)という段階を経るごとに、同世代の児童生徒のうち高学力の層が全国レベルですくい上げられ、集まっていた近代教育制度の第一世代に、南方熊楠とその同年代生まれの子供たちは当たっている。伊予松山出身の正岡常規や秋山真之と、江戸生まれの夏目金之助、そして和歌山出身の南方熊楠らが、東京大学予備門での出会いまでにそれぞれの出身地で経てきた経歴は、こうした時代の文脈でとらえる必要がある。十代半ばまでの南方熊楠は、そうした体験を共有した、同世代の中で読書・学問への親和性がとりわけ高い「秀才」層のひとりであった。

## 1.2 ロンドン遊学まで

東京大学予備門での同級生の中には、東大教員や文部省高官となっていく上田万年(1894年文科大学教授、1898年文部省専門学務局長)、芳賀矢一(1898年文科大学助教授)や夏目金之助(1903年文科大学講師)もいたのだが、彼らのように学校秀才であり続けなかった南方は、試験に落第を重ねた結果、1886年2月には同校を退学し、和歌山へ帰郷する。この年12月に、彼は横浜からの太平洋航路船で渡米し(サンフランシスコ着は翌年1月)、私費留学生としての生活を始めることになる。

親がかりであった南方の学費や生活費は、すべて父弥兵衛(造り酒屋をはじめていた)からの送金に依存していた。当初どの程度の期間、またどういった成果を目標として出発したのかについて、具体的な史料は知られていないが、長男ではなかった南方熊楠が徴兵を避ける手段という意味があった可能性は、これまでしばしば示唆されている。<sup>5</sup>

当初のおもわくがなんであれ、1895年まで8年間のながきをアメリカで過ごした南方は、この年9月にはロンドンへ居を移し、結局1900年10月に神戸港へ帰国するまで足かけ15年間に及ぶ海外生活をする事となった。出発時に19歳だった南方は、帰国時には33歳となっていた。

## 2. 南方熊楠のロンドン

日記(1913年分までが公刊されている)から窺われる南方の生活や人間関係は、ロンドンへ入ってから最初の一年間は、在ロンドンの日本人たちが中心だった。そのことが変わり始めるのが、1893年夏から秋にかけてのことである。すわなち、*Nature* 誌への英文による研究ノートの投稿をはじめ、それと相前後して大英博物館の東洋研究部門に協力者として出入りするようになり、さらに(本稿では取り上げないが)高野山真言宗の宗門幹部となる高僧土宜法龍と深い交わりをもつ、といった重要な出来事が、この時期に集中して起こった。

### 2.1 ロンドンでの邂逅：「学問の尊さ」の原体験

この年8月17日、*Nature* 誌の読者投稿欄に、比較文明史的な問いを提起する投書が掲載された。<sup>6</sup>5項目にわたる問題設定のうち、中国とインドの古代文明が持っていた天文学的認識の関係と両文明の関係そのものについては答えるべき情報を持っていると感じた南方は、その日の日記にこう記した。「本日のネーチュールに M. A. B.なる人、星宿構成のことに付五条の間を出す。予、其最後二条に答んと起稿す。」それから二週間後の8月30日には、「ネーチュールへの答弁稿成」と日記に記されており、この日にはいったん回答の投書を脱稿したものと思われる。この文章を編集部へ宛てて発送した記録は日記にみえないが、校正刷が印刷所から送られてきた旨の記述が9月21日の日記にある(「ネーチュールに予の星宿論を出すに付、印刷所よりプルーフを送らる」)。そして、その翌日の22日に、彼はつてを得て大英博物館の館員フランクス(Sir Augustus Wollaston Franks, 1826-1897)およびリード(Sir Charles Hercules Read, 1857-1929)の二人に面識を得るに至った。前者は、大英博物館の「中興の祖」と評される<sup>7</sup>大学芸員で、南方がその知己を得たのは、半世紀におよんだその博物館勤務歴の最晩年に当たっていた。また後者は、この後大英博物館において南方を協力者として遇し、彼が館(特にその図書室)を利用することを可能にしてくれた人物である。

フランクスおよびリードとの出会いが、校正刷りを受け取った翌日だっ

たのは偶然だが、この出会いは、ロンドンでの南方のあり方を変え、また彼の生涯を変えた。日記によれば南方は、*Nature* への投稿の校正刷は翌23日に返送したようなのだが、この時のことと思われる回想を、1925年に記した自伝(「履歴書」と呼ばれる)の中で彼はこう記している。

この答文の校正ずりを手にして、乞食もあきるような垢じみたるフロックコートでフランスを訪ねしに[…]、少しも小生の服装などを気にかける体なく、くだんの印刷文を校正してくれた上[…]、大いなる銀器に鵝を全煮にしたるを出して[…]小生を饗せられたし。英国学士会員の奢宿にして諸大学の大博士号をいやが上に持ちたるこの七十近き老人が、生処も知れず、たとい知れたところが、和歌山の小さき鍋屋の倅と生まれたものが、何たる資金も学校席位も持たぬ、まるで孤児院出の小僧ごとき当時二十六歳の小生を、かくまで厚遇されたるは全く異数のことで、今日始めて学問の尊きを知ると小生思い申し候。<sup>8</sup>

20代半ばの青年が、ほぼはじめて執筆した英語の論述に対して、当時67歳で引退間近だった奢宿が最大限の好意を示してくれた、と、56歳の南方が回想しているのである。研究者たちの世界に対して寄与すべき学識があるものは、地位や経歴がなくとも、その学識にふさわしく遇される、と感じることが出来たこの体験は、この後1900年の帰国までの間 *Nature* 誌に投稿を続け、また大英博物館の蔵書を研究のために自在に利用した彼の研究生活の原点となった。そして、帰国後も1933年まで *Notes and Queries* への投稿を続ける<sup>9</sup>ことになる南方にとって、生涯大きな意味を持ち続けたことを、この回想は明かしている。なお、42年後のこの回想の中で南方が具体的に挙げているフランスの助言とは、outline と sketch の二語のニュアンスの違いという、ほぼえましいものである。

## 2.2 情報提供者としての南方熊楠

運命の出会いとなった、この9月22日の日記に南方は、「館内の別室を開かれ、仏像、神具等に付尋問あり。リード氏一々ラベルに筆記す」と記している。おそらく、展示室とは別の部屋で収蔵品を示され、日本出身の知識人ゆえに答えることの出来た宗教関連の情報を提供することで、彼は

フランスとリードのふたりの信頼を獲得したのだろう。その後も、こうした情報協力を彼は続けることになる。日本及び東洋の事物について知識があり、また調査をして、その知見を英語で説明出来る人物、つまり「インフォーマント」というのが、大英博物館にとっての南方熊楠の立場であった。なお、南方が大英博物館の館員として勤務していたという表現が、生前からしばしばなされてきたが、これは今日では誤伝ないし虚偽と考えられている。<sup>10</sup> 南方がイギリス時代に対価を得て「勤務」したのは、サウスケンジントン博物館(当時)で、1899年3月17日から30日までの2週間、1日1ギニー(=1ポンド1シリング)で日本資料の調査・整理の仕事をしたときだけと思われる。<sup>11</sup>

彼が大英博物館の研究活動に協力した事例としてしばしば挙げられるのは、彼の滞在中に編輯された『大英博物館日本書籍目録』*Catalogue of Japanese printed books and manuscripts in the Library of the British Museum*である。これは、大英博物館東洋書籍部長だったダグラス(Sir Robert Kennaway Douglas, 1838-1913)が編纂したもので、その序文中に協力者4氏の名前を特筆している(他の三人は、アーネスト・サトウ、ジョージ・アストンと、在英の中国史家橋原陳政)中に、南方熊楠の名前が明記されている。

For advice and assistance in the compilation of this, the largest and fullest Catalogue of Japanese Books ever printed in Europe, I owe a large debt of gratitude to Sir Earnest Satow, K.C.M.G., to Mr. Aston, to Mr. Chinsei Narahara, and to Kumagusu Minakata.<sup>12</sup>

だが、この目録の内容を検証した中西裕は、(南方が頼用した『元亨釈書』著者の虎関師錬の名が、漢字・読みとも誤って「帥錬 Shito」と表記されているなど)固有名詞の扱いをはじめとする内容のずさんさを指摘して、こう述べている。「日本人なら気がつく誤りに満ちた仕事を熊楠に帰することは無理がある。[...]当日録への熊楠の関わりは直接にはほとんどなかったのではないかと想像される<sup>13</sup>」。つまり、大英博物館所蔵の和書について個別に原図書を見、書誌情報を記録ないし確認するといった目録編纂の作業そのものには南方は(ほかのどんな日本人学者も)関わってはいない、

という推測である。これは正しいと思われるが、だとすれば、南方の「貢献」は、編輯責任者であるダグラス（彼は駐清国外交官出身の中国研究者であり、日本研究者だったのではない）から個別に質問を受けた際に答えるという、情報提供者の範囲にとどまっていた可能性が高い。彼の果たした役割は、日本（および東洋）についての研究的知見を英語で提供出来る人物として編輯上生じた疑問に答えるインフォーマントとしてのものだったのだろう。

これと同じ性質の、イギリス人研究者の仕事に対して、従属的受動的に求められた情報を提供するという意味での情報提供者の役割を、彼は帰国後も行った。在英時代に彼がもっとも親しくなったイギリス人であるディキンズ (Frederick Victor Dickins, 1838-1915) は、『百人一首』(1866)、『忠臣蔵』(1875)、『竹取物語』(同年)、北斎『富嶽百景』(1880)、石川雅望・北斎『飛驒匠物語』(1912) など日本の大衆文芸（特に江戸期のもの）多数をイギリスに翻訳紹介した先駆的な業績があり、イギリスの第一世代日本研究者として重要な人物である。そのディキンズは、英語訳とローマ字日本語テキストの2言語で日本文学の重要作品を紹介した通史アンソロジー *Primitive and Medieval Japanese Texts* を編輯、1906年に Oxford University Press から刊行することになるのだが、この編輯作業がなされたのは、南方が帰国後那智山麓に隠棲していた時期にあたる。この時期の、ディキンズから南方への書簡<sup>14</sup>と、南方の日記や書簡（特に土宜法龍宛て）から、万葉集をはじめとする日本の古典文学について南方が研究書を蒐集し、イギリスのディキンズへ提供していたことは如実で、また多数の作品について英語訳を提供していたことが窺われる。両者の連名でイギリスで雑誌発表された「方丈記」英語訳（‘HoJoKi, A Japanese Thoreau of the Twelfth Century’, *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 1905. 4）は、『南方熊楠全集』に収録されたこともあって特に知られているが、これはそうした南方からの情報提供への謝意として、南方からの日本古典翻訳のひとつをディキンズが選び、アンソロジーの完成に一年先行して連名で雑誌発表したものと考えることが出来る。

この翻訳は、のちに、*Ho-Jo-Ki. Notes from a Ten Feet Square Hut* (1907) として Gowans and Gray 社から単行本化された際には、南方の名前が表紙

から消えてディキンズ単独の訳業とされてしまい、南方を憤慨させることになった。しかしディキンズの側からすれば、日本にいる南方からの日本古典の英語訳の提供全体が、インフォーマントとしての情報提供であり、「下訳」と位置付けていたということだったと思われる。<sup>15</sup> 先行して雑誌に発表した際に、南方の名前を並べて連名としたことは、29年年長のディキンズからすれば、むしろ最大限の厚意と謝意の表明だったのだろう。

### 3. ロンドンでの研究活動

そしてそのことは、1900年9月までのロンドン時代に南方が公刊した英文論考のスタンスとも、通底するものがあった。

第一論文 ‘The Constellations of the Far East’ から、*Nature* 誌に掲載した在英最後の投稿 ‘Artificial Deformations of Heads, and Some Customs connected with Polyandry’ に至るまでの一連の論考は、文化間比較を一貫したテーマとし、特に西欧近代科学と、非西欧文化における並行事例を対比させた、比較科学史・技術的な主題が目立つ。‘Early Chinese Observations on Colour Adaptations’ (生物の保護色についての中国での観察)、‘The Earliest Mention of Dictyophora’ (特定のキノコの最古の観察記録)、などである。

同時に、西欧近代科学の立場から正しく説明を与えられる事象についての、代替科学的または民俗知的な説明といった比較民俗学的な関心から拾い上げた事例も、最初期から彼は取り上げている。‘Some Oriental Beliefs about Bees and Wasps’ (*Nature*, no. 1280, 1894. 5. 10) は、やがて長大な文献調査へと発展していく「ブーゴニア」(牛など動物の死体からのミツバチの発生)説話の比較研究の端緒だった。これは、客観的事実としては動物の屍体にウジ虫がわいている現象をミツバチの発生と誤認したものという説明が可能なるものであり、非科学的という意味での民衆知らないし民俗知の一事例だが、彼はヨーロッパ人にとっては旧約聖書のサムソンとデリラの物語(士師記13~16章)のなかの一挿話として知られている説話素(サムソンが引き裂いたライオンの屍体から蜜がわいた)をひとつの類型とみなして、インドをはじめ東西古今の諸文化に類話や類似の誤謬(ミツバチの巣

の中の幼虫と、アブやハエなど別の虫の幼虫との混同)を搜索し、列挙していく。こうした探索は、単に複数の言語文化におよぶというだけでなく、西欧近代の合理的思考(とされるもの)とは異なる、いわば代替知的な認識が列挙され、対比されるという意味でも、自然に比較研究的な視点からのものになる。

そしてその際の彼の論述は、単一の起源から複数の文化へと類似説話が伝播していった経緯を再現するといった理論的整理をめざすというより、検出出来た類例を枚挙するに留め、事実報告のみに内容を限る傾向が顕著である。結果として、論文というより研究ノートというべき短文が、彼の「英文論考」の基本的な著述様式となっていった。<sup>16</sup>

このように、個別事例を短文の報告として英語で書いて、英語圏の読者＝研究者たちに提供するスタイルの彼の投稿の多くは、自分の手で体系的な考察を作り上げ、ひとつの研究にまとめ上げるという野心からよりは、(アジアの言語で記されているから、などの理由で)彼にしか見付けられない情報を英語で紹介して、学界の共有とするという目的からなされているように見える。南方は、大英博物館(の東洋研究者たち)にインフォーマントとして協力していたのと並行して、学術誌への投稿においても、インフォーマントのスタンスに自分の立ち位置を見出したのである。

### 3.1 後世からの評価

そういった南方の、大英博物館での「活躍」、そして *Nature* や *N & Q* 誌への膨大な投稿に対する、後世の読者からの反応は、それほど多くはないが、皆無でもない。

大英博物館を紹介する冊子である *The Story of the British Museum* (1981) において著者マージョリー・ケイギルは、かつての円形読書室に通った著名利用者を列挙するなかで、マルクス、レーニン、ジョージ・バーナード・ショウ、トマス・ハーディ、キプリングといった名だたる著者らと並べて、「2度にわたり喧嘩のため排除された初期の日本人社会学者」に言及している。<sup>17</sup> 暴力沙汰の結果出入り禁止というこの「追放事件」は、南方のロンドン時代の行状のなかでも有名な出来事なのだが、ここで「社会学者」とされていることは、この事件の際に南方が提出した博物館理事会宛て陳情

書<sup>18</sup>で彼が自分の研究的関心をハーバード・スペンサーの社会学と結びつけて説明していることに対応すると考えられ、この「初期の日本人社会学者」が南方熊楠であることは確実である。

また、*Nature* という雑誌そのものの歩みの中での南方に与えられた評価の微妙さを窺わせる文献として、*A Bedside Nature: Genius and Eccentricity in Science 1869-1953* という書物をあげてみたい。これは、ワトソンとクリックの「二重らせん」論文が掲載された年を下限として、1869年の創刊以来の *Nature* 誌の前半生を掲載論考そのものによって紹介するというアンソロジーで、スティーヴン・ジェイ・ゲールドによる長文の解題が付され、約1000本の短文投稿が収録されている。

そのなかには、1893年から1915年までの間に51編を掲載（そのすべては Letters to the Editor 欄）した南方の投稿も1本収録された（「タコの酢とクラゲのアラック」『*Polypus Vinegar — Sea-blubber Arrack*」<sup>19</sup>）。この文章は、南方の著作というよりは、インド・中東地誌の文献のなかにあるふしぎな生物の（生物学というより本草学的・民俗知的な）観察の引用紹介が中心で、その中で引用された英語文献は相当にエキゾチックな文章である。

この南方の短文投稿には、リード文として下記のような説明が付されている。

この投稿を寄せた日本人著者は、ネイチャー誌に頻繁に日本の、主には歴史に関する話題を寄せた。<sup>20</sup>

これは、狭義の自然科学というよりは歴史研究に関心があったことと、日本（ないし東洋）の資料を紹介したことの2点において、南方の一連の投稿全体の紹介としては失当でない。しかし引用された南方の投稿は、歴史的でもなく、日本に関するものでもないという意味で、この紹介と齟齬をきたしている。これは、このアンソロジーに南方が採録された際に編集部から与えられた南方の位置づけが、リード文にあるような異文化性（自然科学的でなく、西歐的でない）というものであり、一連の投稿から1編が選び出された際にも、エキゾチックであるという特徴が決定的だった可能性を示唆している。<sup>21</sup>

これらの、後世からの逸話的な反応は、南方によってそれほど名誉となるものではないかも知れない。

### 3.2 文献研究と生物学

このように、100年後から振り返ってみたとき、ロンドンにおける南方熊楠の姿は、ヴィクトリア朝1890年代という彼のいたロンドンの実相やその時期の研究状況の細部に対応するというものではないようにみえる。<sup>22</sup>彼のしていたことは、大英博物館図書館という無尽蔵の知の収蔵庫に出入りすることで、地域と時代を超越して自分の関心に呼応する情報を集めるという知的営為に遊んだ、といった性質のものだったからかも知れない。

南方が *Nature* や *N & Q* 誌に投稿した英文の研究ノートは、文献調査のなかで出会った生の情報を提供することを軸とするようになっていったが、そうした彼の英文論考の基本的性質は、生物学の世界における彼の学界への貢献と同一のものだったことは強調されてよい。比較文化論的文献研究とはことなり、生物学の分野では南方は自分の著述として論文を発表することがほとんどなかったのだが、そんな彼の生物学への貢献は、大英博物館の変形菌コレクション管理者に対する、日本で採集した標本の送付を中核としていた。そのもっともわかりやすい例が、20世紀前半における変形菌研究の基本文献 *A Monograph of Myetozoa* (A. Lister, G. Lister, 3<sup>rd</sup> ed, 1925) であろう。正規の館職員ではない員外の研究者でありながら、大英博物館変形菌コレクションの管理者を勤めていたアーサー・リスター (Arthur Lister, 1830-1908) と、その最晩年にあたる1906年に通信をはじめた南方は、父アーサー (ワイン商を営んでいたアマチュア) の仕事を引き継いだ娘グリエルマ (Gulielma Lister, 1860-1949) と通信を継続した。南方の採集標本は彼らによって研究資料として活用され、その業績となっていった。イギリスの研究者によって彼の採集標本が採用され、文献に記名されることで、南方の協力が特定地域の採集者としての位置づけを与えられたのであって、<sup>23</sup> これは文献研究の分野でイギリス時代の彼が *Nature* や *N & Q* というメディアに出会い、情報提供の投書をするようになったことと、軌を一にしているといえる。南方熊楠は、大英博物館東洋研究部門の研究者たちとの関係においても、文献研究の成果としての英文論考にお

いても、生物学の分野での標本採集においても、一貫して「インフォーマント」的な立ち位置にいたのである。

### 3.3 英文論考への学界の反応

こうしてみると、南方熊楠は研究者(リサーチャー)であったのか、インフォーマント(情報提供者)にとどまったのか、という20世紀的な問題が存在していることになるのだが、ロンドンにおける南方熊楠を主題とする本論考では、この問題には立ち入らずに、研究者南方熊楠にとってロンドン時代が持つことになった意味を、最後に確認したい。

南方熊楠の学界での活動に対して、それを研究史上の先行業績とする学界的反応も、少数ながら存在する。彼の第一論文‘The Constellations of the Far East’(1893年)における観察(中国古代の星座に、海に関連する事物がないこと)が、ジョゼフ・ニーダムの浩瀚な『中国の科学と文明』で肯定的に言及されたこと<sup>24</sup>や、マンドラゴラという植物の西洋古代以来の神話的伝説と、中国本草学における商陸という植物との比較説話的類似を指摘した彼の論考(1895年から1898年まで)が、ミルチア・エリアーデが40年後に取り組むことになるマンドラゴラの比較説話研究という主題の先駆となった<sup>25</sup>といった事例を筆者は過去に報告したが、こうした後代の研究者による、先行研究としての南方への反応は、彼の晩年や没後にあたるなど、南方自身が再度反応するかたちで研究の循環運動になってはいかないことが多かった。

南方自身を知るに至らなかった学界および一般読書界からの反応は、長い間図書館の書棚に埋もれて南方研究者たちの眼にも触れずにいたのだが、21世紀に入り、学術系刊行物や一般定期刊行物の多数がインターネットのデジタル・ネットワーク上で参照可能になるに従って(とくこの10年ほど)、少しずつ紹介がはじまっている。彼が自身の主要業績と考えていた「さまよえるユダヤ人」‘A Wandering Jew’(主要部分は、1899年から1900年にかけて *N* & *Q* 誌に掲載)は、ヨーロッパの「さまよえるユダヤ人」説話をインドの仏典中の賓頭盧(ピンドーラ)説話と結びつけたもので、学説史上彼の先取性を認めてよいものと思われる<sup>26</sup>が、比較宗教史家・思想家ポール・ケーラス(Paul Carus, 1852-1919)が(鈴木大拙とともに)アメリ

かで公刊していた研究誌 *The Open Court* において、発表から4年後の1903年の時点でその指摘の重要性が紹介されていた、といった発見<sup>27</sup>は、その一例である。

南方熊楠の比較文献研究は、異文化間の偶然の一致や、影響関係の連関の発見といった興味に導かれて彼が生涯続けた採集活動的なもので、その意味で彼の文献研究は生物学上の採集活動と類似する性質のものだった。その採集活動のなかに、ときおり、研究上一定の意義を認められる観察が含まれていたという点でも、彼の生物研究と比較文献研究は通底するものがある。

ときおり彼が拾い上げた興味深い観察を、文献調査の場合彼は *Nature* や *N & Q* のようなメディアに投稿し、これは掲載されることもあればされないこともあった。<sup>28</sup>

イギリスの学術誌への投稿について、すでに言及した1925年の回想では南方はこう述べている。

小生はそのころ、たびたび『ネーチャール』に投書致し、東洋にも(西人一汎の思うところに反して、近古までは欧州に恥じざる科学が、今日より見れば幼稚未熟ながらも)ありたることを西人に知らしむることに勸めたり。<sup>29</sup>

近代に入ってから西洋文明の先進性を認めつつ、歴史上それが限定された期間のことであり、本質において東洋が西洋に劣っているわけではない、という認識に基づいて、そうした歴史的事実を「西人に知らしむる」ことが英文で著述をした目的だったと説明していることは、ロンドンの一東洋人としての南方の自己規定を明かしていて、興味深い。<sup>30</sup>

これは、ロンドンから帰朝して25年後の回想だが、これより以前の1911年、柳田国男との通信がはじまり、ヨーロッパ人に向けてだけでなく日本語により日本人に向けて著述をすることが彼の執筆活動の中で一定の位置を占めるようになったところに、南方は柳田に向けてこのようなことを書き記している。

小生はいかにも無鳥郷の伏翼なり。しかし、かつて鵲鳳の間に起居した覚えはあり。[…]貴下は例せば小生の「神跡考」を見て外国人の東洋研究者が一人多くなれりと思わるるが、小生は日本人の世界研究者が特に一人出でしことと思う。<sup>31</sup>

(柳田國男宛南方熊楠書簡、1911. 10. 17)

日本にいながら、イギリスの英字誌を主要な舞台と考えていた南方に対して柳田が、鳥なき里のコウモリとなじたのに応じて、いわば売り言葉に買い言葉で記されたこの文言は、感情的なだけに、「本場」の舞台に身を置いて、イギリスの学界で意味をもつ報告を自分ではしてきた、という彼の矜持を率直に明かしている。イギリス時代に、*Nature* 誌への投稿をはじめ、同時に大英博物館にインフォーマントとして出入りをはじめたという南方熊楠の学術活動は、1890年代ロンドンにおけるその初期体験の延長上に、その後40年展開していくことになったのである。

#### 注

- 1 1900年8月までに、*Nature* 誌に37本、*Notes and Queries* 誌に13本の研究ノートを発表している。くわえて9月1日に離英した後の両誌にそれぞれ1タイトルづつが掲載されており、これらも出航前の投稿が掲載されたものである。うち *N* の *Q* 誌に掲載された 'Footprints of Gods etc.' は、結局3号分載となった長文の論考だった。
- 2 『南方熊楠英文論考[ネイチャー]誌篇』(集英社、2005)、『南方熊楠英文論考[ノーツ アンド クエリーズ]誌篇』(同、2014)の解題を参照。
- 3 『世界大百科事典』(平凡社、1985、岩村忍執筆)では「生物学者、人類学・民俗学者」、『日本大百科全書』(小学館、1985、井之口章次執筆)では「生物学者、民俗学者」、また日本版『ブリタニカ国際大百科事典』では「植物学者、民俗学者、博物学者」と冒頭に規定している。
- 4 博物学の鳥山啓、書道教師だった漢学者浅井篤(湯川秀樹、貝塚茂樹、小川環樹ら兄弟の祖父)、画学の中村玄晴らを、武内善信『闘う南方熊楠』(勉誠出版、2012、p. 42)は挙げている。
- 5 仁科悟朗『南方熊楠の生涯』(新人物往来社、1994)、飯倉照平『南方熊楠 梟の如く黙座しおる』(ミネルヴァ書房、2006)、吉田芳輝『縛られた巨人南方熊楠』は何に縛られたのか』(『関西英学史研究』2、2006)などがこれま

でにこの点を指摘しており、松居竜五『南方熊楠 複眼の学問構想』（慶應義塾大学出版会、2016、p. 126）がそれを要約している。

- 6 前出『南方熊楠英文論考[ネイチャー]誌篇』に日本語訳を収録。
- 7 出口保夫『物語 大英博物館——二五〇年の軌跡』（中央公論新社、2005）p. 143。
- 8 「履歴書」と通称される矢吹義夫宛1925年1月31日付書簡、『全集』7巻 pp. 13-14
- 9 *N*と*Q*誌1933年1月7日号掲載の‘A Jackdaw Tradition’が、南方の最後の英文論考である。執筆、投稿はその前年末と思われる。
- 10 中西裕「南方熊楠の大英博物館勤務および目録編纂説」（昭和女子大学近代文化研究所『学苑・人間文化学科特輯』785、2006）が、この点に関わる過去の言及を総括している。
- 11 牧田健史、松居竜五「ロンドン南方熊楠関連新資料」『熊楠研究』5、2003、p. 94; p. 100。ここで指摘されているとおり、ロンドン時代のみならず生涯にわたって、南方が賃金労働をしたのは唯一このときだけと思われる。
- 12 *Catalogue of Japanese Printed Books and Manuscripts in the Library of the British Museum*, Robert Kennaway Douglas, ed., 1898, p. vii, Preface.
- 13 前出の中西裕「南方熊楠の大英博物館勤務および目録編纂説」p. 78。
- 14 岩上はる子編『F. V. デイキンズ書簡英文翻刻・邦訳集 アーネスト・サトウ、南方熊楠（他）宛』（エディション・シナプス、2011）に収録。
- 15 南方邸資料の中から発見されたこの英訳「方丈記」のための下書き原稿を検討した小泉博一は、この下書きに基づいて「現在、熊楠とデイキンズ共訳とされているものが、そのまま熊楠の清書草稿であったとは、この訳文の比較から、とても考えられない」（小泉博一「熊楠の英訳『方丈記』の草稿」『熊楠研究』4、2002、p. 20）としている。また南方宛ての1904年11月25日付け書簡でデイキンズは「翻訳をほとんどやり直した」（岩上前掲書 p. xi 解説）と伝えている。南方からデイキンズへ送られた最終訳稿自体は、すべてのデイキンズ宛て南方書簡とともに、未発見である。
- 16 志村真幸「南方熊楠と『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌—‘Footprints of Gods &c.’から「ダイダラホウシの足跡」へ—」（『ヴィクトリア朝文化研究』7、2009）が、南方の情報羅列的なスタイルの背景を詳細に考察している。
- 17 Marjorie Caygill, *The Story of the British Museum*, 1981, p. 39. ケイギルによるこの記述は、前出の出口保夫『物語 大英博物館』および唐澤太輔『南方熊楠日本人の可能性の極限』（中央公論新社、2015）でも紹介されている。
- 18 松居竜五編訳『英国博物館理事会宛陳状書』『熊楠漫筆』（八坂書房、1991）pp. 352-3
- 19 *Nature*, vol. 79, p. 8, 1908.

- 20 ‘The Japanese author of this letter wrote frequently in *Nature* on Japanese topics, usually historical.’ Walter B. Gratzner, ed. *A Bedside Nature*, Macmillan, 1996, p. 127.
- 21 この点を含め、この図書における南方の位置づけの委細については、田村義也「南方熊楠と『*Nature*』」(岩波書店『科学』2013年8月号)を参照されたい。
- 22 川島昭夫「南方熊楠と1890年代ロンドン」(2015年10月10日京都大学におけるシンポジウム「ロンドンの南方熊楠」基調講演、口頭発表)が、南方のロンドン体験が同時代的でないことを指摘した。
- 23 1929年の昭和天皇和歌山県行幸に際して、南方により御進講(主題は「紀州田辺湾の生物」)が行われたことは南方の伝記中の特筆事項だが、これは、生物学者だった昭和天皇が、当時取り組んでいた変形菌研究の基本文献から南方熊楠の存在を知っていたために実現したことと考えられている。
- 24 Joseph Needham, *Science and Civilisation in China*. Vol. 3: *Mathematics and the Sciences of the Heavens and the Earth*. Cambridge University Press, 1959, p. 272. この件については、前出の田村「南方熊楠と『*Nature*』」を参照されたい。
- 25 田村義也「南方熊楠のマンドラゴラ研究」(『熊楠研究』8、2006)を参照されたい。
- 26 「この物語が、実は仏典に起源をもつことを論証したものである」(松居竜五「さまよえるユダヤ人」解説、前出『南方熊楠英文論考[ネイチャー]』誌篇 p. 163)。なお松居は、この主題に関して、帰国後の南方の論述が伝播説と独立発生説のあいだで揺れ続けることを、学界動向と関係づけて論じている。「南方熊楠におけるフォークロアの伝播説—「さまよえるユダヤ人」解説—」(『熊楠研究』3、2001)。
- 27 Albert Edmunds, ‘The Wandering Jew. A Buddhist Parallel’, *The Open Court*, 1903. この記事の存在は、築瀬ペーテル「海外メディアが見た南方熊楠」(『熊楠研究』12、2018)で紹介された。このエドマンズは、のちに*N*と*Q*誌(1913. 1. 18)において南方の論を裏付ける説話事例を報告し、南方はそれを読むことになるが、*The Open Court* 誌での最初の言及は南方の目に入ることがなかったと思われる。
- 28 志村真幸「南方熊楠の『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌への投稿(1)一八九九〜一九一五年：不掲載論考を中心に」(『熊楠研究』9、2015)；同「南方熊楠の『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌への投稿(2)一九一六年〜一九三三年」(『熊楠研究』10、2016)。
- 29 前出の矢吹義夫宛て1925年1月31日付け書簡、『全集』7巻 p. 16。
- 30 こうした彼の西洋文明対抗的な思想が、日本中心主義ではないアジア主義的であったことについては、武内善信「南方熊楠と自由民権——アンナーバー、『大日本』によせて」(学燈社『國文學』2005年8月号)および田村義也

「革命家と「野の遺賢」の邂逅——南方熊楠の非政治的生涯と孫文」『孫文と南方熊楠』（汲古書院、2007年）を参照。

- 31 柳田國男宛 1911年10月17日付南方熊楠書簡、『全集』8巻 p. 191。

—— 成城大学非常勤講師

## Summary

### Minakata Kumagusu in London: The beginning of his academic career (1892–1900)

Yoshiya Tamura

Minakata Kumagusu (1867-1941), a Japanese natural historian and folklorist, is historically prominent as a frequent contributor to British academic periodicals *Nature* and *Notes and Queries*. Staying eight years in London as a young foreign student, Minakata was among the earliest Japanese authors who published in English, and kept contributing nearly 400 articles from 1893 to 1933, though many of them were brief research notes of fragmental nature. By constantly submitting such short letters for forty years from his twenties to sixties, he continued providing the readers of these English magazines with factual information in a wide range of academic interests from comparative folklore to botany. The basic character of his writings could be taken as being made up through his experiences as an independent researcher and unofficial informant of East Asian cultures for the staff members of Oriental researches in the British Museum, and he continued informing the researchers in Britain after leaving London, both through individual communication and through publication as such. His contributions have been regarded as having a certain amount of academic value, both contemporarily and historically. His academic experiences in London seem to have determined his manner of conducting researches, in which Minakata continued publishing both in English and Japanese through his life.